

関ヶ原の合戦 ifワールド

もし、小早川秀秋の裏切りがなかったら歴史はどうなっていただろうか…?〈前編〉

今回のテーマは、壮大で含蓄がある。したがって限られた紙面で書くことは不可能である。

従って次号も含め連載としたいのでご了承願いたい。

1 大谷吉継の死

正午過ぎ、突如西軍の一翼を担っていた小早川軍が裏切り、東軍の藤堂・京極軍と戦っていた大谷吉継軍の横腹目掛けて15,000もの大軍が怒涛の攻撃を仕掛けてきた(60頁「正午布陣図」参照)。小早川秀秋、この時19歳。大谷吉継は

「おのれ小早川秀秋、血迷ったか…亡き太閤殿下のご恩を忘れたか!」

そして、松尾山の小早川秀秋の陣に向かって「秀秋こそ“人面獣心”なり。3年の間に必ず祟りをなさん。覚えておれ」と大声で叫んだ。

吉継は豊臣秀頼公の忠臣であり、智謀に優れた猛将であった。

大谷軍は藤堂・京極軍・裏切った小早川軍に集中攻撃を仕掛けられていた。そこへ想定外のことが起こった。本来西軍であったはずの脇坂・朽木・小川・赤座勢までが東軍に寝返って大谷軍目掛けて攻撃を仕掛けてきたのである。さすがの猛将揃いの大谷軍も支えきれず、大谷の与力の戸田重政・木下頼継等々が次々と奮戦空しく討ち取られていった。垂井の城主平岡為広は、突然大谷吉継の陣中にきた。自分の最期を悟ったのであろう。

「大谷殿、お世話になり申した。わしは、最期に大谷殿の与力として活躍できてかたじけなく思うぞ」

と馬上より大声で叫んだ。吉継は、
「わしのような愚将に義のため命を預けていただけたこと、誠にかたじけなく思うぞ。我こそ、そなたと知友を結べたこと誇りに思うぞ!」と応えた。

為広は馬上よりおだやかな顔で

「冥土で酒でも飲もうぞ。今生の別れでござる。来世でまた会おうぞ、では、さらばじゃ」為広の陰しい顔に涙が流れていた。再度福島正則軍を目掛けて突進していった。そして、壮絶にしてあつばれな最期を遂げたのであった。

一方、大谷吉継軍は、3,500の手勢で2万以上の敵軍に攻撃を受けていた。

「もはやこれまで! 五助、介錯をたのむぞ。この首を決して敵に捕られることなかれ、そちの手で見つからぬ処に埋めてくれ」

五助は「殿・殿……う・う・う……」

堪えようとした涙が、無念さで止めどもなく流れ、止めることができなかった。そして、吉継は小刀に渾身の力を込めて、腹を十文字に見事に掻き切った。

吉継は、最期に「五助、介錯…」と叫んだ。

五助は「殿…御免!」

家臣湯浅五助は、吉継の首を討ち落とした。大谷吉継享年42歳。知将であり有能な猛将の壮絶なる最期であった。また、重臣三浦喜太夫は、主君の遺骸の前で涙を流しながら「無念なり。殿、今お供仕る」

「五助! 主君の御首級をご遺言通り決して敵の手に渡すでないぞ。頼んだぞ!」

五助は「命にかけてお守りし、仰せに従います」と応えた。

また、喜太夫は、「五助、そなたは決して死ぬでないぞ。生きて殿の供養をしてくれぬか。頼む」

そして五助は、「殿の御首級をご供養を致した後、お供いたします」

喜太夫は「それはならぬ。お主の天命のある限り生きて殿のご供養と殿の功績を後世にお伝えせよ! よいか、わかったな! 五助」

五助「はは、わかりました…」

「では殿、この喜太夫ただ今お傍に参ります」
と言って、腹を掻き切って殉死した。その後、吉継の御首級も、五助の消息も途絶えたままである。

大谷軍壊滅!の報を聞き、宇喜多軍・小西軍に動揺が走った。また、石田三成は自ら島津軍に出向き、出撃を要請した。しかし島津義弘は

「待たれよ。出撃の時機はそなたの指示は受けぬ」
と出撃を拒否している。義弘は、歴戦の猛者である。軍略・知略・兵法にも優れた武将である。

話はさかのぼるが合戦前夜のこと、島津義弘は東軍の足並みが揃う前に夜襲を賭けようと提案したが、三成に拒否されている。ここで、三成は義弘の申し出を受けて東軍側に夜襲を賭けていれば、東軍は大混乱となり東軍の軍議で決まった予定の布陣ができず、家康の目論みとは違って西軍有利に運んだであろう。にもかかわらず三成は卑怯であるとして退けた。しかし、夜襲は卑怯ではなく兵法に則った戦術である。実に三成は愚かである。これで絶好の勝機を逸したことになる。戦の実戦経験のない三成の愚かさが随所にみえるひとつの逸話である。義弘は三成に夜襲を拒否されたことで戦意を失っていた。戦いとは、平和な時代ならいざしらず、経験と兵法を基にした応用としての勘が勝利を導くのである。頭のみで考えた実戦経験のない筋書きは通用しない事を三成は判っていなかった。指揮権をもつなら「孫子の兵法^(注1)」や「六韜・三略^(注2)」程度の兵法は知っておくべきである。

三成は戦においては、指揮権を島津・宇喜多に譲るべきであった。三成が高慢な故に勝つための手段より自分のプライドを優先させた悲劇である。適材適所を間違えた例を歴史は物語っている。実に残念である。秀秋の裏切りで、当初は互角の戦いをしていた西軍は総崩れとなった。

戦後この功により、秀秋は備前・美作（現在の岡山県）50万石を家康より与えられた。しかし、東軍の諸将からも「裏切り秀秋」とののしられ相手にされなかった。2年後21歳の若さで秀秋は変死をしている。また、非情にも家康は秀秋の死後小早川家に跡継ぎが無いことを理由に、お家をお取り潰しにしたのである。さかのぼること源頼朝以来続

いた西国の小早川家は、ここに断絶した。また、憐れその家臣も裏切り者として、どの大名家も小早川の家来だったというだけで、仕官を受け入れなかったのである。

2 小早川秀秋の生い立ち

小早川秀秋とはどういう生き方をしてきたかを語らなければ、読者の方々も理解が深まらない。そこで、少々生い立ちを記してみたい。

1582年、秀吉の正室北政所の兄・木下家定の五男として誕生。秀吉と北政所（秀吉の正室）との間に実子がいなかったため、秀吉の実姉の長男として生を受けた秀次が秀吉の後継者の第一候補となり、次に秀秋が第二候補として養子とされていた。幼い秀秋は秀吉に溺愛され、わがまま放題に育ち、北政所もわが子のように育てた。

1589年、秀秋7歳の時、丹波亀山城10万石が与えられた。そして1592年、従三位・権中納言兼左衛門督に叙任された。当時は、秀次に次ぐ豊臣家の承継権保持者と見られていたからである。

「秀秋よ、そなたはこの豊臣家を支えねばならぬ。関白秀次をしっかり支え、りっぱな大将になるのじゃぞ、よいか!」
と秀吉がこやかに言う

「はは、豊臣家のため、太閤殿下のため誠心誠意尽くす所存でございます」と秀秋は意気揚々と答えた。

「さすが北政所の甥じゃな!命は大事にするがよい。たのむぞ秀秋!」

しかし、1593年に淀君が豊臣秀頼を生むと状況は一変した。秀吉は、生まれたばかりの秀頼を豊臣家の跡継ぎに決めたのである。そうすると、秀吉は跡目相続争いを恐れ、関白秀次・秀秋が秀頼の脅威にならぬよう排除に取り掛かったのである。まさに秀吉の180度の方針大転換である。

まず、秀吉は関白秀次に自分への謀反の疑いをかけた。石田三成は秀吉の命で秀次を高野山へ蟄居^{ざんげん}を伝える役目を果たした（このときも三成の讒言があったといわれている）。

その後、秀吉は秀次に弁明の機会も与えず、切腹を命

じた。そして、秀次を三条河原にさらし首にし、遺児(4男1女)・側室・侍女・家臣に至るまで、秀次のさらし首の前で処刑に5時間もかかる程の大量の関係者の処刑をしたのである。秀次を切腹に追い込み、その後にさらし首にすること自体、当時でもあまり前例がない。無残で情け容赦のない悪業である。

秀次が生きていたら豊臣家のあり様も変わっていたし、豊臣家の存続も有り得た。無残な関ヶ原の合戦も回避できたに違いない。これから、豊臣家は崩壊の道を歩むことになるとは、誰が想像したことであろうか。

秀次の生き残った家臣は、恨み骨髓で大半が東軍に参加して活躍している。そして、今度は秀秋の番であった。しかしながら秀秋自身が北政所の甥であるが故、さすがの秀吉も北政所の手前、秀次のように秀秋を殺すわけにはいかなかった。そこで、臣下となった毛利家に養子に出し、秀秋を秀頼の臣下としようと目論んだ。そこで秀吉は毛利家に秀秋を毛利輝元の養子にと小早川隆景に打診した。

ここで話は少しさかのぼるが、まだ織田信長が健在の頃、毛利家には猛将毛利元就の子で毛利隆元・吉川元治(隆元の弟で吉川家に養子に入っていた)・小早川隆景(隆元の弟で小早川家に養子に入っていた)三兄弟が中国地方の覇者として信長に対抗していた時期があった。『三本の矢』で有名な話である。

1593年頃になると、毛利隆元から輝元へ、吉川元治から広家へと代替わりをし、小早川隆景が年長者として毛利一族を束ねていた。秀吉は徳川家康に対抗できるのは毛利一族以外になしと読んでおり、小早川隆景を重用していた。

しかし、このたびの太閤秀吉の「秀秋養子の件」だけは隆景としては受けるわけにはいかなかった。それは隆景としては、毛利家の血筋を守る必要があったからだ。だから秀秋に毛利家を継がせるわけにはいかなかった。かといって、天下人秀吉の申し出を無碍に断ればどんな災いが毛利家に降りかかるかわからない状況であった。

そこで隆景は一計を講じた。小早川隆景には実子がなかった。そこで末弟で毛利元就の九男の秀包を養子としていた。この養子縁組を解消し、小早川家の養子として

丸く収めるべく秀吉に進言したのであった(秀包は毛利姓に復し、分家している)。秀吉も当時最強の小早川水軍が手に入り、小早川は毛利家の一族なので快諾した。

そして隆景は自らは隠居した。そのとき隆景は秀吉より隠居料として三原に5万石を拝領している。代々小早川家に仕えていた知将たちの大半は、隆景に従って三原に行き、隆景の死後は毛利家に帰参している。

従って、関ヶ原合戦時の重臣の稲葉正成・平岡頼勝・松野道円は従来からの小早川家の家臣ではない。秀吉から送り込まれた付家老である。また、平岡頼勝は家康と懇意であり東軍の黒田長政の従姉妹を妻としている。稲葉正成は、徳川家光の乳母を務めた春日局の元夫である。松野道円は、「義」を重んずる小早川隆景も見込んだ猛将で、東軍諸侯の縁故関係はない。

道円には小早川秀秋がどちらにお味方するか迷っていることは知っていたが、西軍側に布陣した以上主君は腹を決めたとみて福島・京極軍の戦いぶりを観察し攻撃に備えていた。そして松野道円は関ヶ原合戦において、先鋒隊長という一番危険ではあるが一番重要な役目を担っていた。

道円は、合戦が始まってもいっこうに出撃命令が出ないのでいらいらしていた。そこへ出撃命令の伝令がきた。しかし、命令内容は到底道円にとって信じがたいものであった。伝令は

「道円殿、敵は大谷吉継なり。即刻吉継軍を攻められよ」
道円は「何に!!この期に及んで家康に寝返るとは、武士にあるまじき道である。亡き太閤殿下や秀頼様に対する反逆ぞ! ご乱心なされたか!!」

と伝令に対して大声で叫んだ。

伝令は「仔細は存知知らず。主君のご命令をお伝え申すまで」

と言って頂上目掛けて駆け上がっていった。

松野道円は、先鋒隊長として、主君の裏切りを知り武士道に反するとして自身の判断で、味方である小早川軍の吉継への攻撃を阻止しようとした。しかし、多勢に無勢であり、また同士撃ちも避けねばならぬとして、軍令違反を承知で戦線を離脱した。後に、道円は豊臣家への忠

義の臣として徳川忠長大納言（徳川家光の弟）に仕官をしている。

3 小早川秀秋が裏切った背景

①石田三成への恨み

秀秋は総大将として、朝鮮に出兵。そのとき、石田三成は軍監（戦いには直接参加せず戦後の論功行賞を行うため、各武将の働きを観察記録する役職）であった。その三成の讒言により、筑前名島30万7,000石から冬は雪深い越前北ノ庄15万石へ転封となった。

②秀頼誕生後、叔父である秀吉の秀秋に対する露骨な態度の変化があり、淀君派の三成に対してかなりの不信感を募らせていた。

③三成の讒言に対して、家康は秀吉に何度もかばいだてしてくれた恩義があった（北政所からの内々の依頼が家康にあったと思われる）。

④秀吉の死後、家康は秀秋の旧領筑前名島30万7,000石へ復帰させていることへの恩義があった。

⑤関ヶ原合戦のとき、老獪な家康のこと家臣の奥平貞治を軍監として秀秋の陣に送り込んだ。また、家老の平岡頼勝の妻は黒田長政の従姉妹であり、黒田長政自身も家臣の大久保猪之助を目付として陣中に送り込んでいる（三成は、秀秋の裏切りの懸念は持っていたが、裏切りに備えての対策をとっていないのは、実戦経験の無さを露呈している）。

⑥筆頭家老稲葉正成（春日局の元夫）・平岡頼勝は家康に恭順の証しとして平岡の弟資重を事前に入質としてすでに主君に内密に黒田に差し出している。

⑦母親がわりの北政所に、家康に味方するよう勧められた。等々が考えられる。

4 小早川秀秋の決戦前夜

秀秋は、合戦の数日前から近江の高宮に滞陣していた。秀秋は「正成、これからどう動くのじゃ」

正成は「戦は関ヶ原辺りと思われます。よって、我が軍は松尾山に布陣したいと考えております。情報によりますと西軍は、鶴翼の陣立（鶴が羽根を広げた陣構え）を取るとの事。よって、松尾山を押さえることは、右翼の要を押さえることでございます。また、松尾山をわが軍が押さえれば、西軍の喉元に剣先を向けていることになります。わが軍が東軍につけば、まさしく西軍の最大の弱点になりましょう。また、関ヶ原一帯が一望に見え、戦況を判断されるには最適と思われます」

秀秋は「それは良き考えじゃ。すぐ、松尾山に移動命令を出せ。三成のやつ、我に秀頼公ご元服まで、関白になってもらいたいということを言ってきたぞ!」と正成に告げた。

正成は「殿、騙されてはなりません。三成のことゆえ勝った暁には反故にされることは十分考えられます。又、小早川家に養子に入った殿を関白になど、例え一時的とはいえ、淀君様が同意するはずもありませぬ、また、毛利ご本家も了解はしないと存じます」と正成は進言した。

現状、冷静な状況判断をすると、三成が淀君を説得できる保証は何もなかった。しかし関白といえば天皇の次の官位である。征夷大將軍よりはるかに高位の官職であり、秀吉と並び立つことができるのである。秀秋にとってはのどから手がでる程の条件である。しかし三成のこと、我を謀る可能性は十分にある。過去でも、朝鮮出兵のおり三成の讒言で減封・転封の憂き目にあっているのである。

関ヶ原において松尾山は、両軍にとってアキレス腱にも値する好立地にあった。そして秀秋軍は14日、他の西軍諸侯に先駆けて松尾山に三成の許可無く布陣した。三成としては、松尾山に毛利軍を配置する予定であった。ここでも、各西軍諸侯の足並みの悪さと家康と違って三成の求心力の無さを露呈している。家康は小早川秀秋が松尾山に布陣したと聞き、床机をたたいて喜んだ。

「よし、小早川の小童めよくやったぞ。これで勝ったも同然じゃ」と叫んだ。

松尾山を押さえることは中山道を確保すること、かつ西軍の横腹であり、秀秋が手筈通り西軍を攻めれば、西軍は総くずれになること百戦練磨の家康に読めないはずが

無かった。家康としては軍目付を送ってあり、家老平岡の弟も人質にとつてある。秀秋には備前・美作50万石に封ずる約束の書状も送ってある。好条件のはずと自負していた。

5 関ヶ原決戦当日

翌15日は、朝から濃い霧が立ち込めていた。背中に付けた家紋の入った旗指物が判別できない程だった。しかし午前8時頃、ようやく霧が晴れたしたのである。

東軍の先鋒は福島正則軍であり、今にも宇喜多軍に襲いかかろうとしていた。そこへ軍監である井伊直政と松平忠吉軍が宇喜多軍に向かって突撃を開始したのである。福島正則は戦功を取られまいとして井伊直政に対して

「先鋒はわしと決まっておる。控えておれ！」

と叫んだが、井伊直政は

「いや、これはあくまで軍監としての戦況把握でござる。怒りを鎮められよ」

と言ひ残し先鋒を抜け駆けし開戦に至ってしまったのである。福島正則も遅れまいと宇喜多軍に総攻撃をかけた。

一方、宇喜多軍は17,000の大軍。総指揮官明石全登は優秀な猛将である。明石全登は、宇喜多軍を幅百間、隊列を20列に分けた。福島軍に切れ目のない攻撃を仕掛けるためである。号令指揮のもと前面の鉄砲隊が射撃すると次列と交替、前列は最後尾で鉄砲の玉込めをし、鉄砲の連続射撃を繰り返した。明石全登は、鉄砲隊に向かって「指令を出す。敵は登り傾斜を攻めてくる。従って攻撃速度は遅い。あわてる必要はない。敵が30間ほどに近づいたら号令を出す。それまでは絶対に撃つな。じっくり引きつけよ。そして狙いをしっかり定めておけ。わしが『撃て』の号令で、最前列の鉄砲隊は一斉射撃をせよ。よいか、まったく恐れる必要はない。宇喜多軍の強さを敵に見せつけようぞ！ 撃ったら最前列の者はすぐ後方に廻れ。次列も合図に従って撃て！ よいか、わかったな。うおー」

宇喜多軍の士気は高かった。

低地からの突撃をしいられた福島・京極軍は宇喜多軍の精度の高い射撃に、前衛部隊は次々と討ち取られて

いった。戦上手で知れたさすがの福島軍も明石の統制のとれた攻撃により五十五間程、じりじりと押し戻されだした。後詰の藤堂高虎は、

「福島殿、一旦引き為され。そして陣立てを立て直されたいかがか。後は我々にまかせよ」

と進言した。しかし負けず嫌いの正則のこと

「なにをいうか。藤堂、我を誰だと思つとるんか。戦いはこれからじゃ。黙っておれ」

と言ひ残し、単身宇喜多軍に再度突撃をしていった。かくして、関ヶ原合戦の火蓋は切って落とされたのである。

6 小早川軍の陣中では

小早川の陣では両軍の動きが手に取るように見えていた。家康から軍目付として派遣された奥平貞治や黒田長政から同様に派遣されている大久保猪之助は、8時の開戦当初から家老の平岡や稲葉に早々の出撃を進言している。奥平は平岡に、

「平岡殿、すでに戦さは始まってござる。即刻大谷軍に向け出撃されてくだされ」

平岡は「まだまだでござる。しばし、待たれよ」

黒田長政より軍目付として派遣されている大久保猪之助も同様な気持ちで催促をしていた。もう10時を過ぎようとしていた。奥平らは、語気を強めて平岡・稲葉に出撃を迫った。そのとき、平岡の堪忍袋の尾が切れた。

「二人とも黙らっしゃい！これ以上言えばお前らを斬り捨て、東軍の家康目掛けて出撃致すぞ。お前らの主君に報告のため下山されよ。小早川は西軍にお味方することを！」

このように言われては、奥平も大久保も二度と口出しができなくなってしまった。10時頃、戦況は一進一退で少し西軍が優勢にみえた。この時点で、勝敗のキャスティングボードは小早川秀秋が握っていた。

稲葉正成が「殿、ここから検分する限りでは、長期戦になるかも知れませんな」

秀秋は「うーん、関白で天下を従えるのも悪くはないな。正成」

正成は「殿、まだお迷いでございますか。天下の形勢は家康になびいております。また、北政所様も家康に味方せよとおっしゃったではありませんか。早めのご決断が肝要かと存じます」

秀秋は「わかっておる。正成、お前はよく戦況を見ておれ。西軍への攻め時は、東軍優勢になった時であるぞ!」

正成は「はは…。^{かしこ}畏まって仕る」

時は流れ、正午近くになっていた。両軍とも戦死者も増え、消耗戦になっていた。伝令がふもとから駆け上がってきた。「殿、徳川軍の鉄砲隊が我が軍に対して、発砲してきました」稲葉正成は「誠に家康公の鉄砲隊なのか。間違いなかるうな!」

すると伝令は「間違いございません。徳川軍の旗印『厭^{えん}離^り穢^え土^ど欣^{こん}求^ぐ浄^{じょう}土^ど』の旗印で御座りました」

秀秋は、床几より立ち上がり、「よし、機も熟した。攻撃を開始する。敵は大谷吉継軍である。総攻撃をせよ!」と叫んだ。

平岡は「命令を下す。敵は大谷吉継ぞ。伝令を呼べ!」

そして伝令に対し、「先方隊長の松野道円殿に殿の命令である。大谷吉継の背後を攻撃せよ、と伝えよ!」

こうして、小早川軍は西軍を裏切り、はじめに記した大谷吉継の壮絶な悲劇につながってゆくのである。

松尾山は、筆者も登ってみたが標高293メートルといえど、頂上までは歩けば1キロ以上十分にあり、道幅は一間(1.8m)と狭く割と急勾配の道であり、道の横は20間(ほぼ36m)程度の片側が断崖絶壁になっている。15,000の大軍が駐屯できる広さはない。従って、秀秋と重臣と見回り役以外の大半の軍勢は、ふもとに駐屯していたものと考えられる。

通説では、家康が業を煮やして小早川軍に鉄砲を撃ち賭けてきた。秀秋は、家康が自ら自分を成敗にきたと思い、恐れで東軍に寝返ったということになっている。しかし、筆者はこの通説には賛同し兼ねる。

松尾山に登り感じたことは、山頂からふもとの眺望は林で遮られ、合戦中の轟音の中で家康の鉄砲隊の音を見分けることは困難である。松尾山の頂上に立ってみると、

絶対に聞こえないし判別もできないことは確か。ましてや、家康の旗印など見えるわけがない。きっと、あわてて伝令が伝えたものと思われる。秀秋が家康の攻撃を恐れたわけではなく、偶然攻撃命令と一致しただけと思われる。攻撃時機も寝返りもすべて、秀秋の意思であり家康の脅しに屈して裏切ったのではないと考えている。

7 合戦布陣図考証

西軍は、鶴翼の陣形を取っている(59頁「午前8時頃開戦直前布陣図」参照)。左翼の笹尾山に石田三成本隊、中心の天満山に島津・小西・宇喜多・大谷、右翼に小早川・脇坂・朽木・小川・赤座を配している。

鶴翼とは、鶴が羽を大きく羽ばたいている形を示し、敵を懷に包み込む形となり絶対的有利な陣形と言われている。まして、西軍は東軍より高台に布陣している。従って、敵の動きが十分に把握できるメリットがある。家康本陣の後方、南宮山には毛利・安国寺・長宗我部が東軍を挟み撃ちができる布陣をとっている。明治時代に来日したドイツの軍略家クレメンス・メッケルは、当初の布陣図を見て即座に西軍が勝利しただろうと断言したという。

しかし、結果は西軍の完膚無き惨敗であった。東軍の開戦前の布陣図を見ると、家康の深慮をかい間みることができる。読者の方は、家康が誰をどの位置に布陣させ、その理由はなにか?また、全体の布陣図を見て家康はなにをもっとも重視して陣容を考えたのかご推察していただきたい。あらかじめ言わせていただければ、この問いには、正解がないことだけは断言できる。筆者は次のように考える。

●まず一番の重要な点は、家康が敗戦に備えて、退路をしっかりと確保していることである。退路に布陣している諸侯は、家康がもっとも信頼を寄せていて裏切らない諸侯たちである。池田輝政・浅野幸長・蜂須賀^{よししげ}至鎮・山内一豊等に15,000もの兵を配置していることで理解できる(たいへんな慎重さが窺える)。退路をしっかりと固めるという意味は、筆者の持論である「わざと遅参させたという説」に基づく、無傷の秀忠が率いる徳川最強精鋭部隊と

合流をし、西軍の出方によっては一旦撤退し、再度東軍をまとめあげもう一戦しようと考えていた。このときこそ、徳川軍67,000と東軍の生き残りを合わせて10万は超え、この軍勢でもって完膚なき勝利を想定していた。家康としては、この関ヶ原の戦いの一番の目的は、三成の討伐もさることながら、最大の目的は、豊臣恩顧同士を戦わせ消耗させることにある。豊臣氏の弱体化が最大の目的のため、ここで自分は敗戦しても死ぬわけにはいかないのである。そして、家康率いる3万の兵(実質戦闘に参加させていない)と秀忠の率いる37,000の兵も、今後の自分の地位保全のためにも絶対温存させなければならない必要性のある軍隊である。合計67,000の親衛隊である。一諸侯でこれだけの大軍を擁するのは、家康の他誰もいない(秀忠軍を遅参させた理由がここにある)。

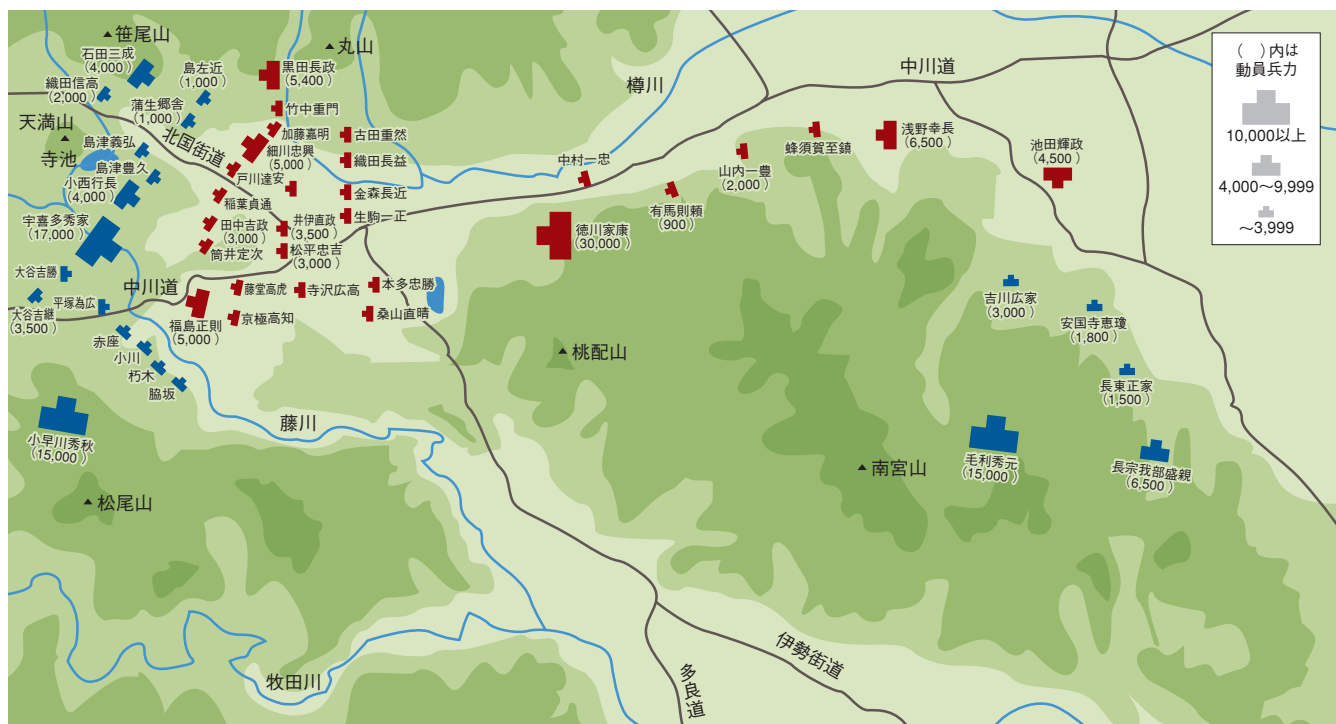
●前線には豊臣恩顧の諸侯を配置。同士打ちをさせている。家康の兵は実質井伊直政と本多忠勝のみである。松平忠吉は、家康の四男で20歳にて今回初陣のため井伊に守られている存在である。

開戦後、正午前家康は最初の布陣地桃配山を出て、西軍の懐深く前進している(「正午布陣図」参照)。これは何を意味しているのか? 勝利を確信したのか?

家康は、開戦前から小早川秀秋の裏切り、南宮山に布陣している毛利が動かないことを確信していたわけではなかった。西軍の静観部隊の多さに家康は、秀秋がたとえ東軍を攻撃してきても、家康本陣は3万の兵である。勝つ自信を静観軍に見せ付けねばならなかった。これぞ将に『孫子の兵法』を実践したのである。

以前小牧・長久手の戦いで秀吉軍に負けない戦の仕方をした家康のこと、この時機での進軍はリスクが大きすぎて通常は有り得ない。なぜならば、小早川軍は大軍である。この小早川軍に家康本隊の横腹を突かれたら、家康本隊3万の兵といえども損傷する可能性は十分にある。また、退却するにも深入りしすぎている。こんな無謀とも言える行動の裏には、勝利への自信を静観軍に見せつけ寝返りを早急に促す「戦わずして勝つ」の極意を実践する必要性があったのである。この戦略にまんまと騙されたのが

午前8時頃 開戦直前布陣図



正午 布陣図



午後2時頃 布陣図



静観軍であった。

正午の小早川・脇田・朽木・赤座・小川が裏切った後の布陣図（60頁「正午布陣図」参照）を見れば、退路を確保することの必要性が無くなり、後詰の池田・浅野・山内は毛利軍に対峙しているだけである。この時点で勝敗は決している。

午後2時頃には、もう西軍は壊滅しており島津のみ取り囲まれている。これから後世に語り継がれた勇猛果敢な薩摩武士の敵陣中央突破である。まさに島津義弘も『孫子の兵法』の「兵は詭道なり」を実践したのである。

通常は、降伏する場面である。東軍も誰も中央突破するなど考えもしなかっただろう。「窮鼠、猫を咬む」のごとく突進してくる島津軍に、東軍は思わず道を空けてしまったのである。その後、東軍は我に返り井伊直政・本多忠勝・松平忠吉の徳川親衛隊が追撃をしたが、島津軍の抵抗で井伊直政・松平忠吉も重傷を負い、後年二人ともこの傷が元で死去している。

8 秀吉の死から関ヶ原合戦までの時代考証

ここで、ifを語るには教科書等々で教えられた日本史の基礎知識としておさらいをしておく必要がある。しかし、今、現代に伝えられている歴史は勝者の歴史であり、勝った者にとっていくらか都合のいいように書き換えられていることを、我々はまず念頭に認識しておかなければならない。

従って、関ヶ原合戦のいろいろな歴史書のタネ本は「神君家康公」として家康が神様となった江戸初期の時代に記録されたものが多く、当然「神君家康公」に不利になる史実はあまり存在しない。また、すでに敗者は皆死んでしまっているので記録がない。勝者の時代考証にはなるが、偽りと証明することも不可能である。そこで、まずは関ヶ原合戦に至るまでの大雑把な史実のみを列挙しておきたい。年号は西暦で統一。年齢は数え年である。

年	月	
1598年	8月	豊臣秀吉、伏見城で没す。（享年62歳）跡継ぎの秀頼6歳。 徳川家康・前田利家は朝鮮との和睦のため使者を朝鮮に派遣。 毛利秀元・石田三成を博多に派遣。朝鮮在陣の諸将の撤退を命じる。
	9月	家康・利家などの全国の諸侯は、豊臣秀頼に忠誠を誓う。 五大老（徳川家康・前田利家・毛利輝元・宇喜多秀家・上杉景勝）五奉行（浅野長政・石田三成・増田長盛・長束正家・前田玄以）は誓約書を秀頼公に提出。
1599年	1月	秀吉の遺命により秀頼が伏見城から大坂城に移城する。
	2月	家康は伊達政宗・福島正則・蜂須賀 ^{おしげ} 至鎮等との私婚に対し、四大老五奉行より秀吉の定めた法度違反を詰問され、家康は利家に誓詞を提出。
	3月	家康は大坂に利家を見舞う。 利家、大坂の屋敷で没す。（享年62歳） 加藤清正・福島正則・黒田長政ら7将は三成を襲撃。 家康は三成の居城佐和山へ隠居させる。 家康、伏見城西の丸に入る。
	8月	上杉景勝転封（越後から会津）領国仕置きのため帰国。 前田利長も領国仕置きのため帰国。
1600年	9月	大坂で家康の暗殺説浮上。 北政所、大坂城西の丸を出る。替わって家康西の丸に入る。 前田利長の謀反の噂を聞き、家康は前田利長征伐を宣言。
	12月	利長は母芳春院を江戸に人質として差し出すことで家康に恭順する。
	2月	堀秀治より上杉景勝謀反の動向を家康に伝える。
	4月	家康は景勝に対し、上洛の命を出す。これに対し景勝の家老直江兼続返書として「直江状」を出す。

年	月	
	6月	家康は諸将を大坂城に集め、会津征伐を宣言。 18日伏見城を発つ。
	7月	家康は江戸城に帰城。 大谷吉継は家康の上杉討伐に合力のため、垂井に到着。しかし、三成より佐和山に來訪を依頼される。ここで、家康の討伐計画を打ち明けられる。吉継は三成に対し、勝ち目なしと説得する。三成より再三の合力を懇願され秀頼公のためと三成との友情と義のため合力を約す。 家康上杉討伐のため、江戸を出立。 三成・吉継に毛利の家臣安国寺恵瓊と家康討伐の作戦を練る。 安国寺恵瓊は、毛利輝元を西軍総大将にと説得する。 輝元、西軍総大将となり大坂城に入城する。 家康、三成の挙兵を受け、小山にて三成討伐の軍議を開く。
	8月	東軍の拠点伏見城陥落。三成、大垣城に入城。 福島正則・細川忠興・加藤嘉明・浅野幸長・本多忠勝・井伊直政勢、岐阜城主 織田秀信を攻撃、降伏させる。
	9月	家康が江戸を出立する。秀忠徳川最強精鋭部隊、信濃に向け出立。 6日 秀忠軍信濃の真田昌幸と開戦する。 7日 家康、駿河に到着。 13日 家康、岐阜に到着。 14日 家康、赤坂の岡山に陣を構える。 15日 東軍7万余・西軍8万余の天下分け目の決戦が開始される。

今回は本題である、「もし、秀秋が裏切らずに東軍を攻撃していたら、戦局はどうなっていたのか、その後の歴史はどうなっていたのか」を書いていきたいと思う。今回は、今回のifワールドを語るのに、実際の歴史を知らなければ面白みに欠けるとの思いから「歴史時代考証」を試してみた。次回、乞うご期待を！

(注1)「孫子の兵法」とは今からさかのぼって、二千五百年前に書かれた兵法書。武田信玄の旗印「風林火山」も孫子の兵法より引用している。「戦わずして勝つ」も「兵は詭道なり」もすべて孫子の兵法に記されている。

(注2) 中国の代表的な兵法書。六韜とは、文・武・龍・虎・豹・犬の韜から成る。三略とは、上略・中略・下略から成る。周代太公望作。

〈参考文献〉

「大いなる謎関ヶ原合戦」 近衛龍春 PHP文庫
「異聞関ヶ原合戦」 古川薫 文芸春秋
「関ヶ原合戦」 笠谷和比古 講談社学術文庫
「歴史群像関ヶ原の戦い」 学研
「完全制覇 関ヶ原大合戦」 外川淳 立風書房

(2012.8.8) 共立総合研究所 特命研究員 三矢 昭夫